



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 満洲語文語における従属節属格主語に関連する文脈について                                                       |
| Author(s)        | 山崎, 雅人                                                                            |
| Citation         | 北方言語研究, 9, 161-175                                                                |
| Issue Date       | 2019-03-15                                                                        |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/88228">https://doi.org/10.14943/88228</a>       |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/73717">https://hdl.handle.net/2115/73717</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 10_yamazaki.pdf                                                                   |



[資料・研究ノート]

満洲語文語における従属節属格主語に関連する文脈について

山 崎 雅 人  
(大阪市立大学)

キーワード：満洲語文語、従属節属格主語、発話の焦点、関連文脈

## 1. はじめに

本稿は、山崎(2018)に挙げた満洲語文語<sup>1</sup>の用例のうち、従属節主語に属格を取る構文に関して、当該事例<sup>2</sup>に関連する文脈を指摘するものである。前稿では、p.128の第二節の始めで「従属節主語に属格を用いた場合は、その前後の文脈において、従属節述部に述べられている行動に関する言及があり、対格を用いた場合は、同じく従属節主語の人物についての言及があり、主格を用いた場合はそのどちらにも該当しない」という仮説を述べた。すなわち、従属節属格主語の後の述部が発話の焦点であれば、そのことがらが前後の文脈でも再度話し手によって言及されるのが自然だと考えるのである。前稿では、属格主語を持つ文自体の分析は示したが、上記の仮説で述べた「その前後の文脈において、従属節述部に述べられている行動に関する言及があり」という部分の実証は、いくつかの例に対して行ったのみであった<sup>3</sup>。従って、この仮説が前稿のその他の例に対しても有効であるかは、未だ明らかではないと考える。そこで、本稿では、前稿掲載の属格主語の例について、当該事例と関連する文脈を指摘し、この形式を用いた場合の談話における文章構造の実例を考察する。用例に逐一あたることにより、前稿で述べた仮説を漏れなく実証するための論考なので、資料・研究ノートとする所以である。

## 2. 関連文脈の事例検証

以下では、山崎(2018)の順に従ってそれぞれの例文<sup>4</sup>を見て行くが、前稿であげた当該事例の例文は「前稿例(1)」のように表記し、日本語訳文のみを記載する<sup>5</sup>。

前稿例(1)「王婆が述べる、『あたしは奥様が(属)おおいに飲むことを知っています』に対しては、直後に述べられた以下の部分に関連する文脈と考える。すなわち、相手の鯨飲ぶりを知っていることに言及する当該事例に続いて飲酒を勧める件であり、前稿例(1)の発話の焦点が“ambula omire”《おおいに飲むこと》にあることから、直後に以下の発言が現れるわけである。

<sup>1</sup> 満洲語文語の格組織及び本稿の例文中の各語につけた表記法については、前稿の注3参照。

<sup>2</sup> 従属節属格主語を持つ例を「当該事例」とし、それと意味的に関連する箇所を「関連(する)文脈」とする。

<sup>3</sup> 前稿例(5b)、(6)、(11)及び(17)については、前稿において関連する箇所を明示した。

<sup>4</sup> 各例文は、『満文 金瓶梅』は CHIN P'ING MEI, 1975, San Francisco: Chinese Materials Center Inc. に、『合璧 聊齋』は、LIAO CHAI CHIH I, 1975, San Francisco: Chinese Materials Center Inc.による。発行年と例文箇所の表記の仕方は、前稿注5参照。

<sup>5</sup> 日本語訳中の属格主語にあたる部分は、ゴチックにして(属)をつける。

(1) gūnin be sula sindafi majige omi,, 第3回 20a3

氣 (対) 暇の 放つ.副動 少し 飲む.命令

「お氣を樂にして少しお飲みなさい」

前稿例(2)「だしぬけに張訥が(属)入ったを見て突如嬉しさがこみあげてきたとは言え」の直前には以下のように記したところがあり、その中の“jang-no, jang-ceng, neneme feksime ini ama de alanaha”《張訥と張誠がまず彼の父に知らせに駆けて行った》という部分が、張訥とその父との再会の先触れとして当該事例へと続く関連文脈中に書かれている。それに続く部分にあるような、妻と死別し子とも離れ離れになった老身の父にとって子供たちの帰宅は劇的な場面であり、前稿例(2)の張訥の入室が発話の焦点になっていることが分かる。

(2) falan de isinaha manggi, jang-no, jang-ceng, neneme feksime ini ama de

敷地 (与) 至る.完了 後 張 訥 張 誠 先に 駆ける.副動 彼の 父 (与)

alanaha, ama, jang-no geneheci, sargan inu dahanduhai bucehe, emteli sakda  
告げに行く.完了 父 張 訥 行く.完了.(奪) 妻 も 引き続き 死ぬ.完了 独り身 老  
g'ugin funcefi beye helmen be tuwame akambihe, 第5巻 14a3-6

男寡 余す.副動 自身 影 (対) 見る.副動 悲嘆にくれる.過去

「敷地に至った後、張訥と張誠がまず駆けて彼の父に告げに行った。父は、張訥が出て行ってから、妻も引き続いて死んだので、独り身の老男寡が身を余し自身の影を見て悲嘆にくれていた」

前稿例(3)「俺も奴の雇人を打ち懲らせという書を呈して、知事が(属)どう処分するかを見てやる」については、当該事例の直後にある、以下の部分が関連文脈と考える。すなわち、前稿例(3)に述べる、知事による処分が発話の焦点となり、それが家人の賛同を得て引き続き訴訟手続きが始められたと話が展開してゆくのである。

(3) booi urse yooni šusihyeme nukcibure jakade hebe toktoho, habšara bithe

家の 人 皆 唆す.副動 勧める.未完 もので 相談 定まる.完了 訴える.未完 書

arafi hiyan de genefi alibuci, 第2巻 33b2-4

作る.副動 県 (位) 行く.副動 手渡す.假定

「家人は皆それがよいと勧めたので相談は定まった。訴状を作って県へ行って手渡せば」

前稿例(4)「劉滄客が見ると、豚が一頭余分になっていた。劉海石が(属)笑うのを聞いて、そのまま伏せていて敢えて少しも動かない」に先立つ関連文脈が以下のものである。そこでは、探している狸が豚に化けて紛れ込んでいるのを見つけた海石が笑ったことが書かれている。この笑い声を聞きながらも身じろぎせず伏せている狸に対する海石の優越感を如実に表している箇所、彼の笑いが発話の焦点と考える。

(4) tereci boo de dosifi kesike be tuwafi, duka tucifi indahūn be wer wer seme  
 そこで家 (位) 入る.副動 猫 (対) 見る.副動 門 出る.副動 犬 (対) こいこいと  
 hūlanjifi hendume, gemu akū sefi, horho neifi injeme  
 呼んで来る.副動 述べる.副動 皆 ない 言う.副動 小屋 開ける.副動 笑う.副動  
 hendume ubade bini sehe,, 第 16 卷 30a2-5  
 述べる.副動 ここに いるぞ 言う.完了

「そこで家に入って猫を見て外へ出て犬をこいこいと呼んできて述べる、『すっかりいない』  
 と言って、小屋を開けて笑って述べる『ここにいたぞ』と言った」

前稿例(7)「女は春梅に尋ねて『奥で何ゆえ騒いでいたか』春梅は、**秋菊が**(属)夜中に戸を  
 開けた一件をあれこれと告げた後、女は秋菊を叩こうと恨んだ」に関連するのが、以下の  
 文脈である。そこでは、潘金蓮が秋菊を折檻する原因となった夜間の忍び歩きとのぞき見  
 に至るまでの行動が描かれている。

(5) gūnihakū cio-gioi amargi buda boode amgahai dobori dulin de isinafi, ilifi  
 思いがけず 秋 菊 奥 台所(位) 寝る.持続 夜 半 (位) 至る.副動 立つ.副動  
 siteki serede booi uce be tulergi ci tabufi neici  
 小用を足す.願望 言う.未完(位) 部屋(属) 鍵 (対) 外 (奪) かける.副動 開ける.仮定  
 ojurakū,, uthai gala tucibufi tabukū be neifi, biya -i elden de jendu  
 できる.否定 そこで 手 出す.副動 留め金(対) 開ける.副動 月(属) 光 (位) ひそかに  
 oksome fa -i jaka de genefi, fa sangga deri tuwaci, boode dengjan gehun  
 歩む.副動 窓(属) 所 (位) 行く.副動 窓 隙間 から 見る.仮定 部屋(位) 灯り 煌々と  
 dabuhabi,, 第 83 回 16a2-6  
 灯る.過去

「思いがけず秋菊は奥の台所で寝ていて夜半に至って起きて小用に行こうと言った時部屋  
 の鍵が外からかかっている開けられない。そこで手を出して留め金をあけて月の光にひそ  
 かに抜き足差し足で窓の所に行き、窓の隙間から見れば、部屋に灯りが煌々と灯っていた」

前稿例(15)「さらに**李嬌児が**(属)潘金蓮は昔夫を薬を盛って殺し、西門慶を連れ込んで、  
 さらに家の男子と通じて、六奥様の母子あの女に迫害されて、死んだと告げるのを聞いて  
 張二官はすなわち受け入れるのを止めた」に関連するのは、その直前で潘金蓮の悪評を春  
 鴻が告げる以下の箇所である。この春鴻の言葉を具体的に裏付けるのが、前稿例(15)の属格  
 主語を持つ従属節部分である。

(6) cūn-hūng, jang-el-guwan -i boode genehe manggi, ere hehe be hojihon de  
 春 鴻 張 二 官 (属) 家(位) 行く.完了 後 この 女 (対) 娘婿 (与)  
 latufi teni tucibuhe sere jakade, 第 87 回 5b8-9  
 取り入る.副動 今しがた 追い出される.完了 言う.未完 もので

「春鴻は、張二官の家に行った後、この女は娘婿に取り入って今しがた追い出されたと言

うので」

前稿例(16)「ある日**薛嫂兒が**(属)潘金蓮は追い出されて王婆の所で売っていると告げるのを聞いて、春梅は晩に守備へ向かって泣いて喉を哽らして述べる」に続く春梅の発言において、従属節述部で述べられている、発話の焦点たる潘金蓮の放逐は以下の部分でも言及されている。

(7) terebe enenggi inu tucimbi seme gūnihakū 第70回 7a5

あの人(対) 今日 また 追い出す.不定 と 思う.完了.否定

「あの人を今日また追い出すとは思わなかったわ」

前稿例(18)「西門慶はあわてて身かがめてお辞儀して述べる、『小官は、**大人が**(属)わざわざ教えて下さったことを承りまして』」に関連するものは、少し離れた先行文脈中の以下の部分である。使者がやって来て饗応の内容を予め伝えたことを、従属節で“gosime tacibuha”《わざわざ教えてくれた》と述べていると考える。

(8) emu inenggi si-men-king, jing ing-be-jiyo de gucu arame tefi bisire

一 日 西 門 慶 ちょうど 応 伯 爵 (与) 友 作る.副動 座る.副動 いる.未完  
de, holkonde alanjime, sung-ioi-ši tubaci niyalma takūrafi, hūwang-tai-ioi  
(位) 突然 告げに来る.副動 宋 御 史そこから 人 遣わす.副動 黄 大 尉  
de bure emu derei aisin menggun -i tetun benjihebi,, aisin -i tampin  
(与) 与える.未完 一 卓(属) 金 銀 (属) 酒器送って来る.過去 金 (属) 銚子  
juwe, aisin -i hūntahan, taili juwe juru, menggun -i ajige hūntahan juwan juru, menggun -i  
二 金 (属) 杯 杯台二 対 銀 (属) 小 杯 十 対 銀 (属)  
cara juwe juru, menggun -i amba, hūntahan duin juru, fulgiyan gecuheri juwe, sese noho  
高杯十 対 銀 (属) 大 杯 四 対 緋 蟒衣 二 金 欄  
suje juwe, nure juwan malu, honin juwe, hūwang-tai-ioi -i tehe cuwan, dung-cang-fu -i  
緞子二 酒 十 甕 羊 二 黄 大 尉 (属) 座る.完了 船 東 昌 府 (属)  
bade isinjiha,, looye de bairengge, ubade doigon de sarin be  
所(位) 到着する.完了 旦那様(与) 求めること ここ(位) 先 (位) 宴会 (対)  
belhereo, ere juwan jakūn de urunakū okdome solimbi  
用意する.未完.疑問 この 十 八 (位) 必ず 招く.副動 招待する.不定  
sembi,, 第65回 23b2-24a2

言う.不定

「ある朝、西門慶が応伯爵とつきあっているところ、突然知らせがあり、宋御史のところから使いのかたが見えて黄大尉に献上する金銀の酒器一卓を送ってきた。ほか、金の銚子二本、金杯二対、銀の小杯十対、銀の食器二対、銀の大杯四対、緋の蟒衣二疋、金欄緞子二疋、酒十甕、羊二頭など。『黄大尉が乗った船は、東昌府に到着している。旦那様をお願いするのですが、ここでまず宴会の用意をされましようか。必ずこの十八日にご招待する

ことで』と言う」

前稿例(19)「それから孟玉楼は、**潘金蓮が**(属)辱しめられたことを耳にして」に先立つ文脈に、以下の通り西門慶が浮気されたことを知って潘金蓮に暴力を振るう描写がある。西門慶が折檻するさまに、当該事例の従属節述部が関連すると考える。

(9) ambula jili banjifi, pan-gin-liyan -i der sere šeyen beyebe šuwak seme emgeri

大いに 怒り 生む.副動 潘 金 蓮 (属) 真っ白な 身(対) びゅっと 一度  
šusihalara jakade, pan-gin-liyan nimere be alime muterakū, yasa muke tuhebume  
鞭くれる もので 潘 金 蓮 病む (対) 受ける.副動 できる.否定 目 水 落とす.副動  
hūlame hendume, 第 12 回 19b3-6  
叫ぶ.副動 述べる.副動

「大いに腹を立てて、潘金蓮の真っ白な身をびゅっとひと鞭くれるので、潘金蓮は痛くてたまらず、涙を落とし叫んで述べる」

前稿例(22)「府尹官の胡師文は、**東官が**(属)書いて送ったを見ると」の従属節の述語で描写されている書簡の作成という行為は、それに先立つ以下の部分で言及されている。

(10) dzeng-gung tuwafi, fi gaifi dung-ping-fu -i hafan de, tondoi getukeleme<sup>6</sup>

曾 公 見る.副動 筆 取る.副動 東 安 府 (属) 官 (与) 公平に取り調べる.副動  
baicafi, giran be, tuwafi<sup>7</sup>, jabun gaifi suwaliyame alanju  
求める.副動 遺骸 (対) 見る.副動 陳述 得る.副動 詳細に 告げて来る.命令  
seme pilefi, 第 48 回 5a8-b1  
と 書き記す.副動

「曾公は見て、筆を取り東安府の府官へ公平に取り調べて、遺骸を見分して、陳述を得て詳細に告げて来いと書き記し」

王婆が潘金蓮の手腕を話題としている、当該事例である前稿例(24)「王婆が述べる、『私はまた**娘さんが**(属)仕事をするのを見たいのです』と言う」の従属節述部のことは、発話の焦点として先立つ箇所と言及された話題であることを、以下の関連文脈が示している。

(11) wang-po injere cirai hendume, niyangdz -i wesihun galai araha

王 婆 笑う.未完 顔(具) 述べる.副動 奥 様 (属) 貴 手(具) 作る.完了  
de sakda beye buceci inu emu sain bade tuhenembi,, niyangdz -i faksi  
(位) 老 身 死ぬ.仮定 また 一 良い 所(位) たどり着く.不定 奥 様 (属) 上手な  
be donjifi goidaha, gelhun akū yandunjihakū,, 第 3 回 9b8-10a2  
(対) 聞く.副動 久しい 敢えて～ない 頼みに来る.完了.否定

<sup>6</sup> getujeleme に見えるが、意味から getukeleme とする。

<sup>7</sup> kowafi に見えるが、意味から tuwafi とする。

「王婆は笑い顔で述べる、『奥様の手ずから作った時に私死んだらまたひとつ良い所にたどり着くことでしょう。奥様の上手なことは聞いて久しいのですが、敢えて頼みに来なかったのです』」

李瓶児が迎春を遣わして西門慶を呼んでこさせる有様が、当該事例である前稿例(25)「西門慶は酔ったと言って…ただ**李瓶児が(属)**呼びに来るのを待ち構える」の後の関連文脈で言及されている。それが以下の箇所である。

(12) sargan jui ing-cūn farhūn de fu-i ninggude tafafi, jortai kesike hūlame  
女 中 迎 春 闇 (位) 塀 (属) 上(位)登る.副動 わざと 猫 呼ぶ.副動  
si-men-king ni ordo de tehe be sabufi, gisun isibuha manggi, 第 13 回 13a5-7  
西 門 慶 (属) 亭 (位) 座る.完了 (対) 見る.副動 言葉 至る.完了 後  
「女中の迎春が闇の中で塀の上に登り、わざと猫を呼んで西門慶が亭にいたのを見て、言葉及んだ後」

当該事例である前稿例(26)「これら三人の尼は口論するのを見て、**小尼が(属)**餅を食べ終えるのを待って、箱を包んで」に先行する関連文脈では、三人の尼に与えられる品々の中にひと箱の餅菓子があり、送別の品が列挙され言及されている。その後、突然として呉月娘と潘金蓮が喧嘩を始める描写が数葉に渡って続き、傍らで帰路に出ようとする三人の尼が出発のタイミングを計り損ねている中、小尼が出された餅菓子を食べ終えるのを潮として旅立ちを切り出すという場面が下の箇所である。関連文脈で触れられた餅が、そのきっかけを作る役どころの小物になっている。

(13) u-yuwei-niyang erde ilifi, ilan gudz boode geneki serede, u-yuwei-niyang  
呉 月 娘 朝 立つ.副動 三 尼 家(位) 行く.願望 言う.未完(位) 呉 月 娘  
niyalma tome emte hose efen sunjata jiha menggun bufi, 第 75 回 34b2-3  
人 毎に 一 箱 餅 五ずつ 銭 銀子 与える.副動  
「呉月娘が朝起きると三人の尼が家に帰ろうと言うので、呉月娘は各人にひと箱の餅を五つつ、銭の銀子を与えて」

前稿例(27)「これは微意ならんとあらんかな。**大人には(属)**ご笑納くださいますよう」において進物を勧められた直後の文脈では、以下のように「どうしてお前の礼品を受け取れようか」と返答していることから、物品のやり取りの正当性をめぐることが焦点となっている会話であると考ええる。

(14) si-men-king hendume, ere ojarahū, si serengge, mini dukai fejergi hoki,  
西 門 慶 述べる.副動 これは なる.否定 お前 は 俺の 門(属) 下 番頭  
emu booi adali kai, bi adarame sini doroi jaka be alime gaire  
一 家(属) 同じ だ 俺 なんで お前(属) 礼(属) 品 (対) 受ける.副動 取る.未完

sefi 第 35 回 25b1-3

言う.副動

「西門慶が述べる、『そいつはいかん。お前という奴は、俺の身内の番頭だ。一家も同じことだ。俺がなんでお前の贈り物を受け取れるか』と言って」

前稿例(28)の文「上様が(属)ご覧になるよう願います」の属格主語を持つ述部が相手自身での実見を要請し、重ねて直後の箇所ではこの書簡について他見無用であると約する文言を提示している。

(15) amala araha gisun ere bithe be beye neifi tuwa, gūwa de

後 作る.完了 言葉この 書 (対) 自身 開く.副動 見る.命令 他者 (与)

donjibuci ojarahū, 第 66 回 9b9-10a3

聞く.使役.仮定 なる.否定

「追伸 本書をご自身で開封のうえお読みください。余人に聞かせることなきよう」

前稿例(29)「応伯爵は彼らふたりが(属)消息を受け入れたことを思い、この機会に彼らに求めようと」の当該事例にある mejige《便り》の内容は、西門慶の発言がふたりに来訪を命じていることで、これが従属節属格主語に続く部分に関連する箇所である。これに以下の部分に関連すると考える。

(16) si-men-king hendume, suweni juwe nofi hacin be duleke manggi,

西 門 慶 述べる.副動 お前たち 二 人 燈籠祭り(対) 過ぎる.完了 後

jai jio, ere udu inenggi mini boode<sup>8</sup> baita bi, 第 43 回 3a3-5

再 来る.命令 この 幾つ 日 我が 家(位) 用事 ある.不定

「西門慶が述べる、『お前たちふたり燈籠祭りがすんだ後、もう一度来い。この数日は我が家で用事があるんだ』」

前稿例(32)「その長老は身かがめて合掌してお辞儀して述べる、『拙僧は奥様が(属)来ることは知らぬ』」が言及している、女性の来訪を長老が知らなかったとの言葉を裏付ける描写は、以下の例が示すように、従属節属格主語に先立つ文脈に現れている。

(17) juwe yacin etuku etuhe haha he fa fodome sujuhei jifi, jang-loo

二 黒 衣 着る.完了 男 息せき切って 駆けつける.持続 来る.副動 長老

de alame, jang-loo si ainu kemuni hūdun tucifi okdonorakū,

(与) 告げる.副動 長老あなた なぜ まだ 早く 出て迎える.副動 行く.否定

dorgi ajige nainai waliyame jihebi sere jakade, jang-loo fusu fasa seme giya-ša etuku

内 小 奥様 参る.副動 来る.過去 言う.未完 もので 長老 大慌てで 袈裟着

<sup>8</sup> 墨で塗りつぶされているが、前後の文脈から boode とする。

nerefi                      hūwašan -i mahala                      etufi, 第 89 回 16b3-7

ひっかける.副動                      僧 (属) 帽                      着用する.副動

「ふたりの黒衣を着た男らが息せき切って駆けつけて来て、長老に告げて、『長老様、あなたはなぜまだ早く出て迎えに行かないのです。うちに若奥様がお参りに来たんですよ』と言うので、長老は大慌てで袈裟着をひっかけて僧帽をかぶって」

前稿例(33)「書童が述べる、『旦那様が(属)教えたことを私は承知いたしました』と言って」については、書童が理解したと述べる、過度の飲酒を戒める西門慶が発した以下の言葉が、直後の当該事例に関連する文脈と考える。

(18) nure be komsokon omi, dere buturinarahū, 第 34 回 24a7-8

酒 (対)                      些か                      飲む.命令                      顔                      荒れないように

「酒を飲むのは少しにしなよ、顔が荒れてはいけないから」

以下の例は玳安が迎えに行った時に発した言葉を記す一方、迎えに行ったというその事実は前稿例(34)「西門慶に尋ねて『今しがたあなたが、応氏の家で酒を飲んで、玳安が(属)迎えに行ったことを、誰か人は気づいたか』」の従属節述部が記述している。

(19) dai-an hendume, hūwašan aifini genehe, oren be inu deijihe,, el-niyang ejen

玳安 述べる.副動                      坊主                      すでに行く.完了                      位牌 (対)                      も                      焼く.完了                      奥                      様                      旦那様  
be erdeken jio                      sehe,                      si-men-king hendume, bi                      ulhihe, 第 16 回 20a7-9

(対)                      早く来る.命令                      言う.完了                      西                      門                      慶 述べる.副動                      俺                      分かる.完了

「玳安が述べる、『坊さんはすでに行きました。位牌も焼きました。奥様が旦那様に早く来てくださいます』西門慶が述べる、『分かった』」

前稿例(39)「潘金蓮が(属)ひとりで休んだことは言わず、西門慶は李瓶児と共に互いに慈しみ愛して酒を飲みながら語っては夜半になった後」の前に、以下の通り潘金蓮が休息を取ったという事実を述べた描写があり、当該事例はそれと関連すると考える。

(20) pan-gin-liyan, cūn-mei be duka                      yaksibufi,                      boode                      dosifi                      emhun

潘                      金                      蓮                      春                      梅 (対)                      門                      閉める.使役.副動                      部屋(位)                      進む.副動                      ひとり  
deduhe, 第 20 回 6a9-b1

休む.完了

「潘金蓮は春梅に門を閉めさせ、部屋に帰ってひとりで休んだ」

前稿例(40)「西門慶は下座で主人となって座った。歌う声は(属)美しく香しく、舞う姿は俊敏で麗しく、酒は水のように注ぎ、酒の肴山のごとく積み上げたを語ったと言って尽きない」の当該事例の前の文脈において、以下の通り歌う様子の紹介があり、これが関連する箇所と考える。

(21) tereci jeng-ai-hiyang yatuhan, u-in-el fifan fitheme, han;-ioi-cuwan carki dume,  
 それから 鄭 愛 香 箏 呉銀兒 琵琶 弾く.副動 韓 玉 釧 拍板 鳴らす.副動  
 fulgiyan femen be neifi šeyen weihe be tucibufi, neneme šui-siyan-dz mudan -i  
 赤い 唇 (対) 開く.副動 白い 歯 (対) 露にする.副動 まず 水 仙 子 曲 (属)  
 sain aisin -i hungkerehe tasha uju -i pai sere ucun be uculehe, 第 32 回 10b6-9  
 良い 金 (具) 模る.完了 虎 頭 (属) 牌 言う.未完 唄 (対) 歌う.完了  
 「それから鄭愛香は箏を、呉銀兒は琵琶を弾き、韓玉釧は拍板を鳴らし、赤い唇を開き白  
 い 歯をあらわにして、まず水仙子曲の 良い金で模った虎頭の牌と言う唄を歌った」

前稿例(41)「李瓶兒は、**潘金蓮が**(属)あてこすって悪口を言ったことをまた何度も口にし  
 ない」の当該事例の前に、以下の通り jorime toore 《あてこする》とあり、これが関連文脈  
 と考えられる。

(22) li-ping-el ergide, iletu imbe jorime toore be getuken -i  
 李 瓶 兒 側(位) 明らかに彼女(対) 示して.副動 罵る.未完 (対) はっきりと  
 donjifi fancapai gala gemu šahūraka, korsucun be kirifi jilgan  
 聞いて.副動 恨む.持続 手 皆 冷える.完了 恨めしい (対) 我慢する.副動 声  
 tucirakū, jili banjicibe olhome gisurerakū, 第 41 回 19b2-6  
 出す.否定 怒り 生む.容認 畏れる.副動 語る.否定  
 「李瓶兒の側で、明らかに自分を示して罵るのをはっきりと聞いても恨みを抱いたまま両  
 手とも冷たくなった。恨めしいことを我慢して声を出さず、腹を立てても語らない」

前稿例(44)「あんたたちふたりなんで笑うの。潘金蓮が述べる、『私はもちろん**旦那様が**(属)  
 平安をぶったので笑った』」に関連する文脈は、このやり取りの前にある以下の箇所が始ま  
 る、西門慶が軍卒を使って平安を拷問する場面と考える。

(23) si-men-king hendume, erun baitalame bahanara urse ibe, ere  
 西 門 慶 述べる.副動 刑罰 行う.副動 できる.未完 者たち 進み出る.命令 この  
 aha be nimebume dzandzela sehe, tere nergin de juwe coohai niyalma  
 奴 (対) 責める.副動 指責めする.命令 言う.完了その 時 (位) 二 兵 士  
 ibefi, emke dzandz be simhun de etubufi emdubei tatara  
 進み出る.副動 一度 指責め具 (対) 指 (与) 付ける.使役.副動 大層 引く.未完  
 jakade, ping-an fintame nimere de hamirakū sureme hendume, 第 35 回 15a9-b3  
 もので 平 安 痛む.副動 疼く.未完 (与) たまらず 叫ぶ.副動 述べる.副動  
 「西門慶が述べる、『刑罰を行える者ども、前に出よ。こやつを拷問せんと指責めしろ』と  
 言った。その時にふたりの兵士が進み出て、一度指責め具を指に付けさせて大層引っ張る  
 ので、平安は痛んでは疼くのでたまらず叫んで述べる」

前稿例(45)「西門慶が述べる、『なぜ**錢糧**を納めないのか。来保も鄆王の賦に名がある。

毎月ただ三銭の銀を上納するのだ』韓道国が述べる、『保様のことは太師様が(属)あちらより書簡を書いて詳らかにして送るので、敢えて手出しをしないだけです』に関連する以下の箇所は、韓道国が弁明のための書簡を出して上納金を収めるようにすることで来保と同様に、課される仕事を免除される術を西門慶が勧めている。

(24) si-men-king hendume, uttu oci tetendere, si emu giyei-tiyei bithe ara  
西門慶 述べる.副動 それならば それでよい お前 一 掲帖 書 書く.命令  
bi zin-heo-ki de yandufi, sini jalin fu -i wang-fung-ceng de hendufi, sini gebube  
私 任 後 溪(与)頼む.副動 お前(属)ため府(属)王 奉 承 (与) 話す.副動 お前(属)名(対)  
efulefi, enteheme ciyanliyang jafabure, 第 67 回 7b8-8a2  
免じる.副動 恒常的に 錢糧 納める.使役.副動  
「西門慶が述べる、『それならばそれでよい。お前はひとつ上申書を書け。俺が任後溪に頼んで、お前のため府の王奉承に話してお前の名前を消してもらい、今後ずっと免役錢を納めさせるということにしよう』」

前稿例(46)「思えば我々は決して度を過ぎて行っていない。勝手に言わせておけばよい。旦那様が(属)あちらで自ずとひとつはっきりと考えた所があるからと言って」に関連する以下の箇所は、当該事例で西門慶が旦那様と呼んでいる翟執事からの言葉で、互いの意思が通じ合っていることを言明している。

(25) lai-boo nenehe baita be si-men-king de emu jergi alafi hendume, jai-ye,  
来 保 先の 事 (対) 西門慶 (与) 一 通り 報告する.副動 述べる.副動 翟様  
looye -i bithe be tuwafi hendume, ere baita mangga ba akū, sini  
旦那様 (属) 書 (対) 見て.副動 述べる.副動 この 事 難しい 所 なし あなたの  
looye be,, mujilen sulakan sinda se, 第 48 回 29a6-9  
主人(対) 心 寛いで 置く.命令 言う.命令  
「来保は先の事を西門慶にひと通り報告して述べる、『翟様は旦那様の書を見ておっしゃいべまして、『この事に難しい所はない。あなたの主人は、気持ちを楽にしておくがよからうと告げなさい』と』」

時間的前後を表す文にも属格主語が現れる。前稿例(47)「それから西門慶は、応伯爵が(属)行った後、手で四つ金の腕輪を取り内心すっかり可愛がり口に出さずにいながら心で考えて」の属格主語の節が述べる応伯爵の出立に、以下の箇所が示す、直前の会話での発言「食事をせずに出かけたい」との意思の表明が関連すると考える。

(26) si-men-king, ing-be-jiyo be bibufi buda jefu serede,  
西門慶 応伯爵 (対) 引き留める.副動 飯 食べる.命令 言う.未完(位)  
ing-be-jiyo hendume, bi jeterakū, geneki,, 第 43 回 4a8  
応伯爵 述べる.副動 私 食べる.否定 行く.願望

「西門慶は応伯爵を引き留め食事をせよと言うと、応伯爵は述べる、『私はいただきます。お暇したく存じます』」

以下の先行文脈においては亭主が廊に行くことを一般的に述べるため hahasi が主格形となっているのに対して、廊通いを発話の焦点としている前稿例(48)「呉月娘が述べる、『あんたはこれらの旦那様が(属)明日廊に行った後、あんたが試みにその方を探しに行ってください』」の当該事例では、属格主語により述部を焦点として対照的かつ個別的に扱っていることが分かる。

(27) pan-gin-liyan hendume, niyalma booi hahasi, gise hehei falan de yabufi  
 潘 金 蓮 述べる.副動 人 家(属) 亭主ら 廊 (位) 行く.副動  
 jihe amala, booi hehesi tubade baihanahangge akū nio, baime bahafi  
 来る.完了 後 家(属) 女房ら そこへ たずねて行くこと ない か 探す.副動 得る.副動  
 daišame tananuhangge inu bi,, 第 46 回 21b4-6  
 暴れる.副動 叩き合うこと も ある.不定  
 「潘金蓮が述べる、『人の家の亭主らが廊へ行って来た後、家の女房らそこへたずねて行かないだろうか。探し出して暴れて叩き合うこともあるんだ』」

主節主語の後の名詞に属格助詞を付けることで、従属節主語の構文であることが明示的になると考える。前稿例(49)「苗青は先に主人が(属)叩いたとき大変恨んで、常に仕返しをしようと言いながら決して便宜を得ずにいた。口では言わないけれども」中の当該事例となる属格主語の文の二葉前にあって、関連文脈と見なすことができる、苗天秀が苗青を折檻する描写が以下の場面である。

(28) miyoo-tiyan-sio gaitai sabufi sume gisureburakū, miyoo-cing be  
 苗 天 秀 俄かに 見る.副動 分かる.副動 語る.使役.否定 苗 青 (対)  
 emu jergi ujeleme tantafi, gashūtai bošoki sere de miyoo-cing  
 一 度 重んじる.副動 打つ.副動 誓って 追い立てる.願望 言う.未完 苗 青  
 golofi niyaman adaki de baifi, dahūn dahūn -i tafulafi, teni  
 恐れる.副動 親 隣 (位) 求める.副動 再三 忠告する.副動 ようやく  
 guwebufi boode bibuhe,, 第 47 回 2b4-7  
 許される.副動 家(位) とどまる.完了  
 「苗天秀は俄かに見て分かって語らせず。苗青を一度重々しく打ち、誓って追い立てようと言うと苗青は恐れて隣に求め、再三忠告してようやく許されて家にとどまった」

さらに離れた箇所例がある。前稿例(50)「常二君は家主が(属)催促するのに耐えられずかつまた嫂がさらにまた毎日咎めて恨むので」の四葉以前にある、家主とのやり取りの言及が以下の箇所である。

(29) tereci cang-ši-jiyei tere inenggi si-men-king de baiha menggun kemuni

それより常時節あの日西門慶(与)求める.完了銀なお

gala de isinara unde dade, booi ejen geli inenggi dobori akū

手(位)至る.未完未だ～ない始めに家(属)主また昼夜なく

šorgimbi,, 第56回 2a5-7

催促する.不定

「それより常時節はあの日に西門慶に求めた銀がなお未だ手に至らない始めに、家主また昼夜なく催促する」

山崎(2018: 140-141)で論じたように、短文形式の韻文や諺などは、本来簡潔な表現を特徴とする文体を持ち、一般的な内容や真理を表現するもので、その場合は前後文脈に関連する所を持つ必要はないと考える。ただし、山崎(2018: 142)であげた前稿例(54)「武二が(属)剣を執って殺さんとするをいかに知ったのだろうか」という詩に関しては、属格主語の後に続く、以下の部分が関連する文脈であると考えられる。

(30) emu galai loho jafafi hehei der sere šeyen tunggen be emgeri korire jakade,

一手(具)刀取る.副動女(属)真白い胸(対)一度に挟る.副動もので

konggohon emu fulgiyan sangga tucifi senggi bur seme eyeme, tere

ぽっかり開いた一赤い穴出る.副動血ダクダクと流れる.副動かの

hehe -i usihai gesa yasa debsehun ofi, juwe bethe emdubei feshešembī, 第87回 19b6-9

女(属)星(属)如き目ダラリなる.副動両脚ひたすら痙攣する.不定

「片手で刀を取り女の真白い胸を一度に挟らんとするもので、ぽっかり開いた一つの赤い穴が開いて血がダクダクと流れ、かの女の星のような目はダラリとなり両脚は空しくビクビクと動く」

原漢文「誰知武二持刀殺」は、他の詩文と異なり、『金瓶梅』の内容に沿ったものであるため、文中に関連文脈を持つものと考えられる。

比喩を表す語 adali 《同じ》、gesa 《～のような》を含む表現に用いられる副詞節の中に属格主語を持つ例がふたつある。ある表現を比喩として理解するためには、その言語が通用する文化内での共通理解を成り立たせる知識面の基盤が聞き手にも共有されていることが必要である。前稿例(55)「ふたりの芸妓の手を取り、阮肇と劉晨が(属)誤って天台山に入ったように翡翠軒に入った」では、「阮肇と劉晨が誤って天台山に入った」という表現を比喩として含意することを理解するためには、このふたりが山で異界に迷い込み後に現世に戻るという物語を知っていることを要するし、前稿例(56)「奇怪な風が(属)骨にしみこんだように冷える」であれば、「骨にしみいる寒さ」という感覚を共有することが肝要である。そうした場合は、文中に関連する箇所を必要とせず、言語外の百科事典的知識に支えられるものと考えられる。

前稿例(58)「この方を連れて奥様方に歌って聞かせてください。何とも郁大姐が(属)歌うのより真に上でしょう」の「この方」とは、郁大姐と比較して称揚されている申二姐であ

る。関連文脈が当該事例の数葉後にあり、そこでもこの二人が比較されていることから、属格主語を持つ述部が発話の焦点になることが分かる。さらに、当該事例の数葉前にも主節に視覚動詞を持ち従属節に属格主語を持つ構文があり、両者が比較されている。

(31) tere emu hehe siyan-šeng šen-el-jiyei serengge be hūlafi gajiha bihe,,  
 かの 一 女 先 生 申 二 姐 言う者 (対) 呼ぶ.副動 連れて来る.完了 ある.完了  
 se asihan bime uculerengge mujakū sain, ioi-da-jiyei ci ambula wesihun,, 第 61 回 11a4-6  
 年 若く いて 唄うこと 大変 良い 郁 大 姐 (奪) 大層 上  
 「かのお一方の女の先生で申二姐さんと言う者を呼んできたのだった。年は若くて唄うことが大変にうまく、郁姐さんより大層上手だ」

以下の関連文脈は、これら三か所の中では最初に出ているが、他の二か所 (7a7-8 の前稿例(58)と上記(31)) とは言及する順が逆になって、郁大姐が申二姐に及ばないとの言い方になっている。

(32) bi cananggi looye boode genehe de, tere ioi-da-jiyei -i uculehe be  
 私 先日 旦那様 家(位) 行く.完了 (位) かの 郁 大 姐が(属) 唄う.完了 (対)  
 tuwaci, umesi juken, ere šen-el-jiyei de isirakū,, 第 61 回 4b1-2  
 見る.仮定 とても 月並み これ 申 二 姐 (与) 至る.否定  
 「私が先日旦那様の家に行った時、かの郁姐さんが唄ったのを見れば、とても月並みで、この方は申二姐さんに及ばないでしょうよ」

医師が自らの手腕を誇る文言の中で、ことさら脈を診ることに言及したものが当該事例である前稿例(59)「七表八裏を弁え、脈が(属)浮き沈みするのを平らかにする」であり、その直前ですでに脈をとる技法に以下の言及があり、そこと関連すると考える。

(33) me de oci simhun nikebume somishūn turgun be bahanambi,  
 脈 (与) なる.仮定 指 付着する.使役.副動 隠れた 理由 (対) 分かる.不定  
 ninggun sukduin duin erin be tuwame, in-yang ni da dube be ilgambi,, 第 61 回 35b9-36a2  
 六 気 四 時 (対) 見る.副動 陰 陽 (属) 本 末 (対) 分別する.不定  
 「脈になれば指をぴったり沿わせ隠れた理由を了解する。六気四時を見ては、陰陽の本末を分別する」

### 3. おわりに

本稿は、久保(1981)に始まる満洲語文語の従属節属格主語の研究のひとつに位置づけられる山崎(2018)で論じた、発話の焦点となる情報を先導する属格主語の機能について、焦点である情報価値の高さに対応して、前後の文脈になんらかの言及があるところを関連箇所として具体的に指摘した。前稿と合わせ、これまで掲載した従属節述部を発話の焦点とする、属格主語構文の全ての例について、関連する文脈があることを確認することができた。こ

れにより、久保(1981)、早田(2013)並びに早田(2015)が論じる統語的特徴の研究に対し、機能面からのアプローチを掘り下げることができ、この言語で従属節に属格主語を用いる場合について、構文的特徴のみならず意味的關係性を文脈上に認めることで、包括的な研究が進展すると考える。

今後は、早田(2011)で扱われている従属節対格主語についても、山崎(2015)で提起した機能を再考し、考察を進めたいと考える。

## 謝辞

本稿の掲載にあたり、二名の匿名査読者からの有益な指示により改稿できたことを感謝します。また、論文掲載の決定を下された編集者にも感謝します。なお、本稿の責任はすべて著者が負うものです。

## 略号

(主)：主格、(属)：属格、(対)：対格、(与)：与格、(位)：位格、(具)：具格、(奪)：奪格  
副動：副動詞、未完：未完了

## 参考文献

- 早田清冷(2013)「満洲語の属格：同格および連体節主語を表す場合」『水門 言葉と歴史』25: 172-178.  
———(2015)「古典満洲語の「同格の属格」について」『言語研究』147: 7-30.  
早田輝洋(2011)「満洲語における対格主語」『九州大学言語学論集』32: 203-214.  
久保智之(1981)「満洲語文語の従属文の主語がとる助詞 i および be について」『九大言語学研究室報告』2: 46-50.  
山崎雅人(2015)「アルタイ諸語、朝鮮語、日本語の従属節対格主語の機能について」『日本言語学会 第150回大会予稿集』50-55.  
———(2018)「満洲語文語の従属節属格主語の機能について」『北方言語研究』8: 127-146.

## 資料

《新刻繡像批評 金瓶梅》曾校本、1990年、三聯書店有限公司、香港  
小野忍・千田九一訳 1980年『金瓶梅』東京：平凡社  
早田輝洋訳註 1998年『満文金瓶梅訳注 序一第十回』東京：第一書房  
増田渉・松枝茂夫・常石茂訳 1980年『聊齋志異』東京：平凡社

## Contexts Related to the Genitive Subject in Subordinate Clauses of Written Manchu

Masato YAMAZAKI  
(Osaka City University)

Yamazaki (2018) demonstrated the functions of Written Manchu subordinate subjects in the genitive form. The study argued the main function of genitive subjects is introducing information in focus mentioned in subordinate clauses. This paper shows contexts related to the genitive subject in subordinate clauses using examples in Yamazaki (2018), and it demonstrates that information in focus, which is introduced in subordinate predicates is referred to in context before and/or after sentences including the genitive subject.

In the following sentences, Lio Hai-shi's laughing is the focus of the utterance, and therefore his laughter is also mentioned in the previous context.

○*gemu akū sefi, horho neifi injeme hendume ubade bini sehe,, ... lio-hai-ši -i(gen.) injere be donjifi, uthai deduhe gelhen akū majige aššarakū,*

“People said, ‘No one is here’. (Lio Hai-shi) opened a door of the hut, laughed out loud and said, ‘Here you are’. ... Hearing Lio Hai-shi laughing, (the raccoon dog) was lying there and did not move at all.”

The word *injeme* “laughing” is used in a context prior to *injere* “laugh” in the subordinate predicate.

The following example is the first part of a conversation between Wang Po and her interlocutor, where drinking is the focus of the dialogue.

○*wang-po hendume, sakda beye bi, niyangdz -i(gen.) ambula omire be sambi,, gūnin be sula sindafi majige omi,,*

“Wang Po said, ‘I know you drink a lot. Feel free to drink a bit.’”

The subordinate predicate contains *omire* “drink”, and the succeeding utterance also includes *omi* “drink” (in the imperative form).

(やまざき・まさと yamazaki@lit.osaka-cu.ac.jp)